

館長だより第22号(2020/12)

スポット展「奈良国立博物館所蔵品里帰り展—経塚に願いを込めて—」

新型コロナウイルス感染の第二波がようやく終息しつつあるように思えたにもかかわらず、早くも第三波が始まったともいえる今日この頃ですが、皆様方にはお変わりございませんか？

当館では秋季特別展「埴輪が語る古墳の祀り」がお陰様で、無事好評のうちに終了しました。

さて、今回は現在準備中のスポット展について紹介します。テーマは、「奈良国立博物館所蔵品里帰り展—経塚に願いを込めて—」です。開催期間は、令和3年1月9日(土)から3月14日(日)の予定です。

この展示は、国立博物館と県立紀伊風土記の丘との間に締結された「考古資料相互活用促進事業」として実施されるものです。この事業は、双方が所蔵する考古資料を相互に貸借することによって体系的な展示・公開を行い、考古資料を有効に活用することで、来館者の多様かつ高度な学習ニーズに応えることを目的としています。当館では、奈良国立博物館が所蔵する県内の経塚出土品の里帰り展示を実施いたします。

ところで、今から約1000年前の平安時代から鎌倉時代には自然災害や飢饉が続いたことから、世紀末の現象、仏教でいうところの末法思想が流行しました。末法思想とは、釈迦の入滅後、正法(しょうほう)・像法(ぞうほう)・末法(まつほう)と組み合わせて、末法思想の教義的根拠の一つとなったものですが、その組み合わせ方は一定していません。中国仏教は、『周書異記』に基づき仏滅を周穆王五十二壬申(BC. 949)とみなし、これによれば、末法元年は中国では南北朝末期(AD. 552)、日本では平安後期・永承七年(1052)となります。

経塚とは、釈迦入滅後56億7千年後に弥勒菩薩が釈迦の再来として地上におりて衆生を救う時に備えて、それまで大切に経典を保管しようという人々の願いを込め、仏教の経典を書写し、巻物にして、銅鏡、陶磁器などとともに耐久性に優れた容器(経筒)に収め、儀式に従って祀り、地中に埋納したものです。

今回は、奈良国立博物館に所蔵されている県内の経塚資料の一部を借用し、関連資料と併せてスポット展示を実施し、その時代の人々が経塚に託した願いについて紹介します。

【主な展示資料】

・伝白浜経塚(白浜町)【奈良国立博物館所蔵】

銅製高坏、木製高坏(複製)、草花双鳥文鏡、青白磁合子、火舎・六器・壺・甕

・粉河経塚(産土神社経塚1号)(紀の川市)【奈良国立博物館所蔵】

外容器、経筒

・粉河経塚(産土神社経塚2号)(紀の川市)【産土神社蔵、紀伊風土記の丘寄託】

外容器、経筒、鉄刀子、鉄鈴、鉄製提子、瓦器椀

・粉河経塚(産土神社経塚3号)(紀の川市)【産土神社蔵、紀伊風土記の丘寄託】

須恵器壺、和鏡

以上